

ご視聴の皆さまへ

- 配信動画および資料の著作権は、横浜市リハビリテーション事業団が保有します。
- 動画および資料の無断転載、複製、転用、販売等の二次利用は、固く禁じます。
- この配信動画は、当センター利用者の保護者の方のみ視聴可能です。
- 第三者に動画および付属資料の URL を拡散することはお控えください。

発達障害の基礎知識 ～主に幼児の方向け版～

横浜市西部地域療育センター
医師

YRS
ユアーズ

基礎講座、発達障害の基礎知識をご視聴いただきありがとうございます。ここでは、主に幼児期のお子さんを念頭に、発達専門医の立場から基本的な話を解説いたします。

主な発達障害

ASD（自閉スペクトラム症）

LD（学習障害）

AD/HD（注意欠如多動症）

主な発達障害には、ASD、自閉スペクトラム症、LD、学習障害、ADHD、注意欠如多動症があります。
以下にそれぞれ解説いたします。

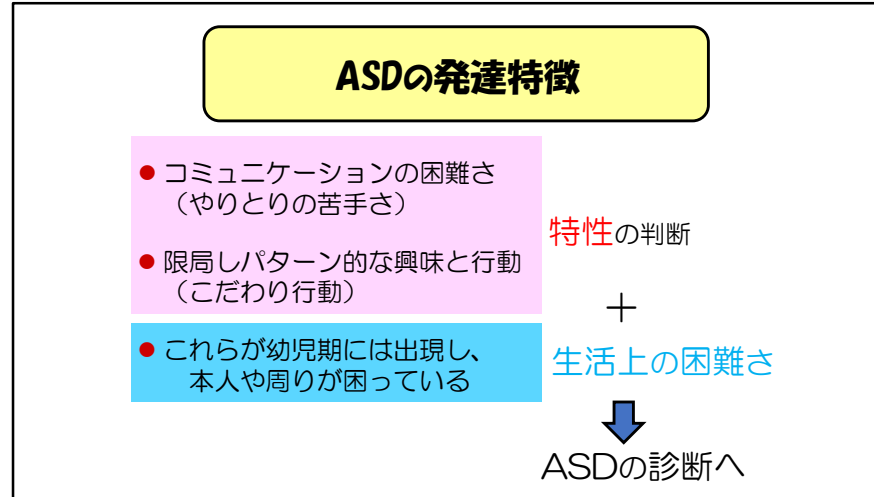
自閉スペクトラム症(ASD)とは？

「脳の機能」に原因がある発達障害

- 脳の病気ではありません
- ミクロなレベルでの脳の違いといわれています



自閉スペクトラム症、以下ASDと呼びますが、医学的には「脳の機能」に原因がある発達障害の一つとされます。脳の機能といっても、脳の病気ではありません。実際に、脳の画像検査などを詳しく行っても、なんともないことが殆ど全てです。そのため、医学的にはASDは脳の病気ではなく目には見えないミクロなレベルでの脳の違いと理解されています。



ASDの発達上の特徴は大きく2つあります。一つは、コミュニケーションの困難さ、やりとりの苦手さです。これについては次のスライドで詳しく説明します。もう一つは限局しパターンの興味と行動とありますが、こだわりという言い方で有名です。診察では、お子さんのご様子などからこれらの特性について判断しますが、診断するためにはこれらの特性があることで普段の生活で本人や周りが困っている、つまり生活上の困難があることが条件となります。そのため、診察では、診察室の様子に加えてふだんどうですかという生活の様子と照合した上で診断が行われることになります。

コミュニケーションの 質的な困難さ

■ 言葉のコミュニケーション

■ 言葉以外のコミュニケーション

ジェスチャー、表情などのちょっとした仕草、
ことばに込められた意図や感情 など



言葉が遅れているだけとはいえない

さて、ASDの最大の特徴であるコミュニケーションの質的な困難さについてご説明します。ポイントは、ASDの特徴は、言葉のコミュニケーションつまり会話だけでなく、言葉以外のコミュニケーションも困難であるということです。言葉以外のコミュニケーションとは、ジェスチャー、表情などのちょっとした仕草、ことばに込められた意図や感情などであり、言葉が遅れているだけとはいえないということです。

限局しパターンのな 興味と行動（こだわり行動）

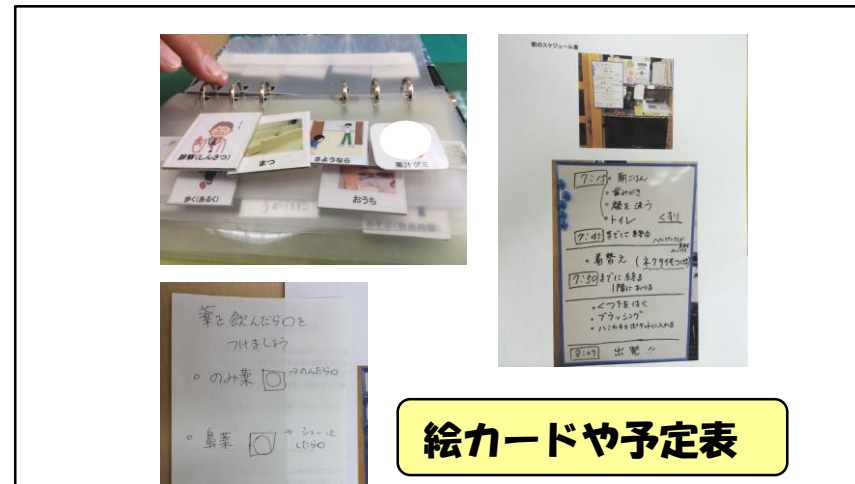
- 興味・関心の幅が狭い（概して深いことが多い）
- 特定の物・手順・遊び方・ルール などのこだわり
- いつまでも同じことを繰り返す
- パターンが変えられると不安、パニック、自傷

ASDの発達特徴の2つ目は、こだわりです。正式には、限局しパターンのな興味と行動といいます。一般的にも、人には何らかのこだわりを持つものでして、一般的なこだわりとASDのこだわりとどう違うかというと、実のところは明確な違いはないとされます。ただし、ASDの場合には、一般的なこだわりの範囲を飛び越えて興味や関心の幅が狭く、概して深いことが多いです。こだわりには色々あって、電車や回転するものなど特定の物から手順、遊び方、ルールなど様々です。ドアを開けたり閉めたり、くるくると回転していたりと、いつまでの同じことをくり返したりします。一部のASDの方は、パターンが変えられると不安、パニックから自分をたたくといった自傷に至る人もいます。

その他の特徴

- 目から入る情報の方が耳から入る情報より得意（「百聞は一見に如かず」）
- 見通しがもてないと不安
- 特定の感覚に過敏あるいは鈍い
- 記憶がよい（嫌な記憶が残りやすいことも）
- 運動が苦手なことがある（手先、バランスなど）

ここからは、その他の特徴として、ASDの全員にあてはまるわけではありませんが、育てる上でポイントになりやすい事柄をまとめてあります。一つ目は、目から入る情報の方が耳から入る情報より得意、いわゆる百聞は一見に如かずです。



絵カードや予定表

視覚的な情報が得意な場合、このような絵カードや予定表を用いることで、状況を良く理解して適切に行動をすることができるようになります。

その他の特徴

- 目から入る情報の方が耳から入る情報より得意（「百聞は一見に如かず」）
- 見通しがもてないと不安
- 特定の感覚に過敏あるいは鈍い
- 記憶がよい（嫌な記憶が残りやすいことも）
- 運動が苦手なことがある（手先、バランスなど）

2つ目の特徴は、見通しがもてないと不安になりやすいというものです。裏を返すと不安が強い場合に、見通しをもたせるような支援をすると安心して活動できるということです。

その他の特徴

- 目から入る情報の方が耳から入る情報より得意（「百聞は一見に如かず」）
- 見通しがもてないと不安
- 特定の感覚に過敏あるいは鈍い
- 記憶がよい（嫌な記憶が残りやすいことも）
- 運動が苦手なことがある（手先、バランスなど）

特定の感覚に過敏あるいは鈍いというタイプの人もあります。

その他の特徴

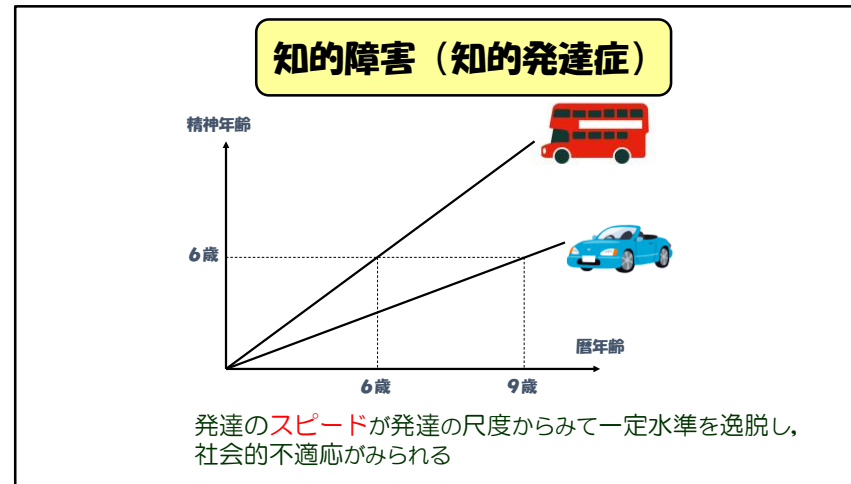
- 目から入る情報の方が耳から入る情報より得意（「百聞は一見に如かず」）
- 見通しがもてないと不安
- 特定の感覚に過敏あるいは鈍い
- 記憶がよい（嫌な記憶が残りやすいことも）
- 運動が苦手なことがある（手先、バランスなど）

次に、ASDの全員ではありませんが、記憶が良いという人もいます。機械的な記憶が長けていて優れた能力を発揮することもあります。嫌な記憶が残りやすい人もいて、何年も前にあった嫌な出来事をいつまでも鮮明に覚えていて、思い出すとつい昨日あった出来事のようにリアルに記憶がよみがえってしまい、それが非常に不快という人もいます。

その他の特徴

- 目から入る情報の方が耳から入る情報より得意（「百聞は一見に如かず」）
- 見通しがもてないと不安
- 特定の感覚に過敏あるいは鈍い
- 記憶がよい（嫌な記憶が残りやすいことも）
- 運動が苦手なことがある（手先、バランスなど）

最後に、運動が苦手なことがあります。運動は、手先を使うような細かい運動と、全身を使うような大きな運動があります。得意という人もいますが、それらが苦手で、学習や生活面で支障が出てしまう方もいます。



知的障害という診断もあります。知的障害は、知的発達症ともいって、発達が年齢に比べてゆっくりな状態を指します。この絵では、二階建てバスのように、横軸の暦年齢、つまり6歳のお誕生日の時に縦軸の精神年齢も6歳の場合、ちょうど平均的な発達のスピードであると判断されます。それに対して、オープンカーのように、9歳のお誕生日の時に縦軸の精神年齢が6歳の場合、年齢に比べて3歳分の遅れがあると考えます。二階建てバスに比べてオープンカーは発達がゆっくりというわけです。発達のスピードは通常、発達の検査などを行い判断します。

LD(学習障害)の主症状

話す・聞く



読み・書き



算数



その他, 不器用, ことばの問題, など…

発達全体に遅れがある場合は、知的障害と診断

次はLD、学習障害です。LDは、全体的な遅れはないにもかかわらず、話す・聞く、読み書き、算数といった、人が学習する上の基礎となる発達が特異的に弱さがあることを指します。発達全体に遅れがある場合には、LDではなく知的障害と診断されます。

誤解されやすい症状・・・



LDは多彩な学習に関連した症状があり、加えて「誤解されやすい」という特徴があります。全然学習ができないというわけではなく、例えばクラスの中で一番できないというわけではないことも往々にしてあります。いつも接しているご家族や先生から見ても、真面目にやっていないのでは、できそうでできない、できたりできなかつたりする、単なるケアレスミス、など分かりにくいところがあって本人も周りも悩んでしまいます。

環境改善的アプローチ



読み書きの習得よりも、授業内容の理解や活動への参加に力点
本人、学校、周囲の理解が導入には必要となる

LDの対応は、環境改善的アプローチがポイントになります。これは、タブレットを導入して読み書きの補助をしたり、計算機を積極的に使ったり、課題を行う時間を延長するなど、本人を変えるのではなく、環境に働きかける方法です。読み書きの習得よりも、授業内容の理解や活動への参加に力点を置きます。環境改善的アプローチには、本人、学校、周囲の理解が必要になります。

LD診断の意義

- 子どもにあった学習環境を設定できる。
- 子どもの周囲、特に保護者と教師が子どものよき理解者となることができる。
- 不安やイライラなど、二次障害を最小限に抑える。

診断および、詳しい評価は小学生になってから

LD診断の意義は、子どもに合った学習環境を設定することで環境改善的アプローチを進めやすくなります。
また、誤解されやすい症状であるLDに対して、子どもの周囲、特に保護者さんと教師が子どものよき理解者となることができます。
それにより、不安やイライラなどの二次障害と呼ばれる症状を最小限に抑えることができます。
なお、LDの診断およびそのための詳しい評価はなかなか複雑で難しいため、小学生、お子さんにもよりますが小学3年生以降になってから可能となります。

AD/HD（注意欠如多動症）

- Attention Deficit/Hyperactivity Disorder
- 不注意・多動性・衝動性の3つの行動を認める

最後にADHD、注意欠如多動症です。英語の頭文字をとってADHDと呼んでいます。
不注意、多動性、衝動性の3つの行動を認めます。

活発？好奇心？

小学校2年生 男の子

幼児期はとにかくたえず動き回る子であった。小学校に入り、なんとか着席しているものの、足をモジモジさせ落ち着きがない。授業中も注意が散漫になってしまう。本人も、なぜ他の子のように自分がうまくできないのか悩んでいる。



ADHDのお子さんの例です。幼児期はとにかくたえず動き回る子であった。小学校に入り、なんとか着席しているものの、足をモジモジさせ落ち着きがない。授業中も色々なことが気になってしまい注意が散漫になってしまう。本人も、なぜ他の子のように自分がうまくできないのか悩んでいる。

AD/HD（注意欠如多動症）

■ 不注意・多動性・衝動性の3つの行動を認める

12歳以前に症状の存在
6ヶ月間以上の症状持続
学校と家庭など、2箇所以上で症状が存在

確定診断は、小学生になってからが多い

ADHDは、不注意、多動性、衝動性の3つの行動を認めますが、それらがあれば即診断がつくわけではなく、一定以上のレベルを超えていることが条件になります。

それ以外にも、12歳前からこれらの症状があること、6か月以上症状が持続していること、学校と家庭など2か所以上で症状が存在することなど、いくつかの条件があります。これらの基準があるため、幼児期には確定診断がつきにくく、小学校にあがってから診断がつくことが多いです。

多動…それは曖昧な概念

AD/HDの多動



不安



あせ
焦り



イライラ



人間はさまざまな状況で行動が落ち着かなくなるものです。

ADHDの多動は、ぜんまいで動くおもちゃのようなイメージで、体が勝手に動いてしまいます。

それに対して、気持ちがあせったり、不安になったり、イライラする時に落ち着かなくなる場合は、ADHDとは別
のものと考えており、対応法も変わってきます。

多動＝ADHDではなく、多動の原因を探る、という視点が大事になってきます。

診断の意味

- 発達障害の特性をふまえた育て方のコツを知る
キーワード
- 今すべきこと、今がんばらなくていいことの
整理がしやすくなる
- 発達支援に必要なサービスに
つながりやすくなる



発達障害の診断は、レッテルを貼るためのものではなく、発達障害の特性をもつ子どもの育て方のコツを知るキーワードとして診断を行うものです。診断によって、今すべきことを鮮明にして、逆に今がんばらなくていいことを整理することにも役立ちます。集団場面でどのような支援を行ったら良いかなど、診断があることでその子に合わせた発達支援に必要なサービスにつながりやすくなります。



子育ての基本的な考え方は、強みを生かすという考え方です。苦手なところをできるようにするにはどうしたらいいか、という考え方も重要ではありますが、その視点だけだとたちまちドン詰まってしまうことが多いです。これはわれわれの専門である療育の分野でも同様で、何か生かせるこの子の強みはないかなと探ることが療育の目的にもなります。

**（特に幼児期）苦手なことは
“とりあえず後回し”くらいが丁度よい**

- 狙ってできるようになるものではない。
- そのうちにできることも。
- “やらせる”ことで、生活・情緒面の不安定につながることも。



どんなことは今はやらなくていいのか、
個々に相談することができます。



特に幼児期は、苦手なことは「とりあえず後回し」くらいに思っていた方が親としてちょうどいいように思います。そもそも狙ってできるようになるものではなく、トイレや食事などに多いですがそうこうしているうちにそのうちにできることもあります。お医者さんの性的には、無理にやらせることで苦手意識が強まったり、生活や情緒面での不安定さにつながることもあるので注意が必要です。この辺りは個別性が高いので、どんなことは今はがんばってやらなくてもいいのか、個々に相談することができますのでスタッフなどに質問してみてください。

月 火 水 木 金 土 日・・・



その●●は役に立つのか？

現代は、利用しようと思えば色々な発達にかんするサービスがあります。何もなかった昔に比べてサービスが広がったこと自体は良いことと思いますが、そのために、月曜はここに行ってこういうことをする、火曜はまた別のところに行ってこういうことをする、というように様々なことを詰め込むと、それに慣れるのに精一杯となつて、効果的な育ちにつながらなかったり、親子で疲弊してしまって元も子もないということに陥る場合もあり注意が必要です。

普遍的な万能薬というものはない

P.ハウリン (2003)



<https://www.kcl.ac.uk/people/patricia-howlin>より引用

その●●は役に立つのか？

また、色々なサービスの中には、「これをやっておけば大丈夫」みたいに断言をするような広告もあり、それにも注意が必要です。ASDの専門家であるイギリスのハウリンという人は、「普遍的な万能薬というものはない」と述べました。つまり、ASDの子どもは非常に多様で一人一人違いますから、その子に合わせた発達支援のやり方を考える必要があるということです。

**苦手さと持ち味は
周りの見方次第ともいえる**

融通がきかない	⇔	妥協をしない
周りにあわせられない	⇔	一本気で筋を通す
うそがわからない	⇔	オモテウラがない、 信用できる正直者
強いこだわり	⇔	深い知識、豊かな趣味
変わったヤツ	⇔	面白い魅力人、 〇〇博士

また、苦手さと持ち味は表裏一体のところがあります。そのため、左側にあるようなネガティブで苦手なことも、ASDの場合はそれを何かに生かせる持ち味にならないかと思って見てあげると、それが実際に本人の強みとして発揮されるということがあります。



持ち味を生かすといっても、それは本格的には小学生以降です。幼児期はそのための発達の土台を作っていきます。特に、ことばや集団活動が苦手なお子さんが多い中、まずは「本人が分かるものを見つける」ということを重視しておきたいところです。これはその一例で、空間という目に見えないものを仕切りを用いるなどして見える化する空間の構造化と呼ばれる療育です。子どもたちは、遊ぶところと作業や勉強するところがはっきり分かり、自発的に行動をとりやすくなります。

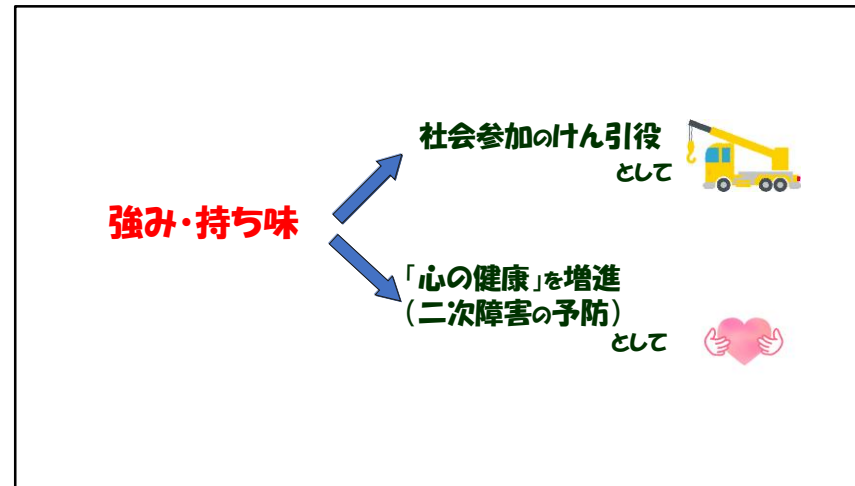
**本人が「わかるもの」を見つける
絵カードを使ったおしたく**



同じく、絵カードを用いることで一つ一つ言われなくてもおしたくをすることができます。このような方法によって、生活にそくしたことばを学んでいくことにもつながります。



このように絵カードなどを用いた視覚的工夫は、コミュニケーションを育てる上で有用ですが、一つ注意点があります。いつしか、水戸黄門のご印籠のように、このカードを見せれば言われたとおりに動くようになると思いこんでしまうことです。これまで見てきたように、視覚的工夫は、本人が見通しをもって生活し自分で判断する自律性を育むためのものであり、思い通りに動いてもらいたいと命令に使うためのものではありません。一生懸命になるうちに、いつしかなになんてはいけないという×マークが多くなることもあるので要注意です。



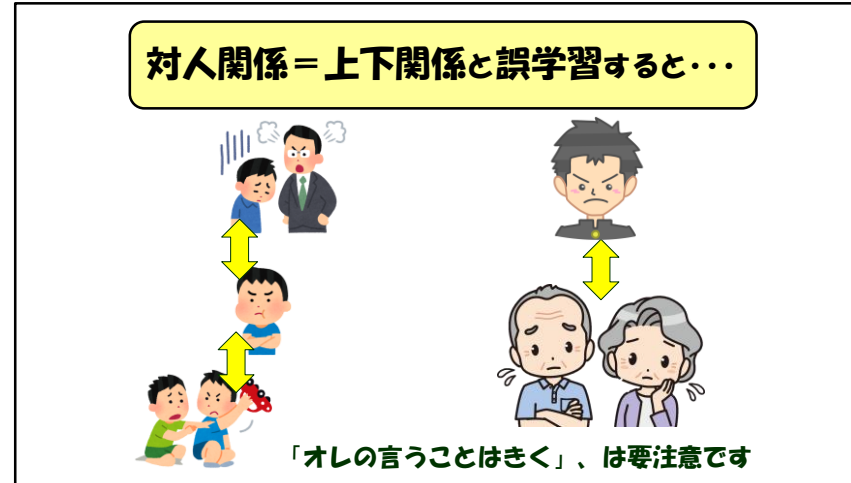
お子さんの強みや持ち味を見つけていくことも大切です。子どもが小さいうちは、なかなか強みや見つかりにくいかもしれませんが、強みや持ち味があると、幼稚園や保育園、学校など社会参加のけん引役を担ってくれたり、ひいては心の健康を増進することにもつながります。

叱り方のコツ

- シンプル *is* ベスト
- 視覚的にかかわるクセをつける
(言葉かけを多用しない)
- 「ダメ」だけではなく、肯定形で伝える
- 周囲が一環した対応を心がける

「叱る」もコミュニケーションの一つですね！

子どもをどのように叱ったらよいか、よく質問をいただきますが、まず悪気がない場合には叱ってもピンとこず次につながらないため、今は仕方ないと割り切り、危なくないことであれば叱りすぎないように心がけたいです。叱る際には、簡潔にできるだけ短く伝えます。一度で分からせようとくどくど話してしまうと、何が何だか分からなくなって学びにつながりません。短く伝えるコツとして、視覚的にかかわるクセをつけたり、「ダメ」だけではなく肯定形で伝えるようにしましょう。例えば、ある時はOKだけどある時はダメとなったり、お母さんはOKだけどお父さんはダメだったりすると、子どもからすると対応が一貫しないため混乱してしまいます。何をOKとして何をダメとするか、周囲が一貫した対応を心がけるようにしましょう。総じていえば、叱るのもコミュニケーションの一つということです。



叱り方で特に気をつけたいことがあります。大人が強く叱ると、どうしても上下関係が生まれてしまいます。大人が上、子どもが下という構図です。その際に、ASDタイプの子どもの中には、世の中の対人関係が全て上下関係で成り立っていると誤って学習してしまうことがあります。すると、相手が自分よりも強いと判断した場合にはその相手に従いますが、自分よりも弱いと判断した場合には従わずにかえって相手を無理にでも従わせようとして、かえって問題が大きくなるのです。親子の間で上下関係を学んでしまうと、大きくなっていつか自分が強くなった時に、親の言うことには全く従わなくなってしまうこともあるため、小さいうちから強く叱ることをし過ぎない方が無難です。

集団活動で社会性の土台を身に付けていく

- 幼児期の基本は、**安心感**の提供。
無理に周囲に合わせることを強要することで、
「友だちといるのっていやだな」とならないように！
- うまくいったという体験を通して社会的行動を学ぶ

幼児期は集団活動で社会性の土台を身に付けていきます。その際に、幼児期の基本となるのは、安心感の提供です。

最初から無理に周囲に合わせることを強要することで、

友だちといるのっていやだなとならないようにすることが重要です。

いざこざやケンカから人間関係を学ぶという発想は、お子さんのタイプによっては逆効果となるため、うまくいったという体験を通して社会的行動を学ぶことを心がけましょう。

以上で、基礎講座を終わります。ご視聴いただき、どうもありがとうございました。